

岩槻藩遷喬館の歴史

●寛政11年(1799)

児玉南柯が私塾として遷喬館を開く

●文化2年(1805)～文化8年(1811)頃

岩槻藩の藩校となる

●文化11年(1814)

建物の修理が行われる

●明治4年(1871)

廃藩置県により廃校となる

●昭和14年(1939)

埼玉県の史跡に指定される

●昭和31年(1956)

遷喬館の土地・建物が岩槻市(当時)に寄贈され、翌年にかけて修理が行われる

●平成15年(2003)～平成18年(2006)

解体修理・復原工事が行われる



(株)文化財工学研究所 提供

解体修理・復原工事の様子

利用案内

開館時間

午前9時から午後4時30分まで

休館日

毎週月曜日(休日を除く)

休日の翌日(土曜日・日曜日・休日を除く)

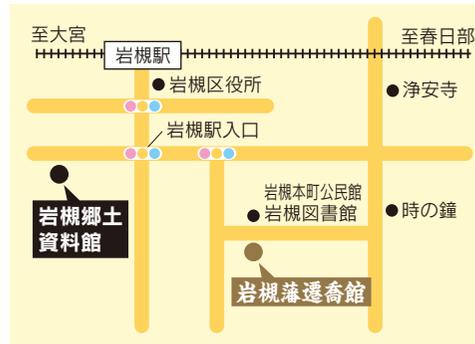
年末年始(12月28日～1月4日)

※休館日は変更になることがありますのでお問い合わせください。

入館料

無料

岩槻藩遷喬館案内図



交通のご案内：東武アーバンパークライン(野田線)「岩槻駅」より徒歩10分

【岩槻藩遷喬館】

〒339-0057

埼玉県さいたま市岩槻区本町4-8-9

TEL・FAX 048(757)5110



〈近隣施設のご案内〉～岩槻郷土資料館～

資料館の建物は、昭和5年(1930)に建てられた岩槻警察署の庁舎です。建物は簡素な外観ですが、丸窓・庇等にアーチや丸柱に昭和初期の特徴が見られます。平成28年(2016)8月1日に、国の登録有形文化財(建造物)に登録されました。館内の展示は、「大昔のくらし」「岩槻のあゆみ」「くらしの道具」の三つの柱で構成されており、岩槻区の歴史を知ることができます。また、児玉南柯の遺品や岩槻藩遷喬館に関する資料も一部展示しています。

埼玉県指定史跡

岩槻藩遷喬館



せんきょうかん いわつきはん じゆしゃ こだまなん か
遷喬館は岩槻藩に仕えていた儒者・児玉南柯が、武家地にある裏小路の一角に開いた私塾で、後に藩校となりました。最盛期には梅林を伴った広大な敷地の中、武芸稽古場、学問の神様菅原道真を祀った菅神廟、南柯の自宅、築山・池泉、観望台なども設けられました。

江戸時代、全国には多くの藩校が開校されていましたが、現在も建物が残っているものは非常に少なく、県内で唯一残っているのがこの遷喬館です。



現在の岩槻藩遷喬館内部(教場)



児玉南柯自画像(82歳)

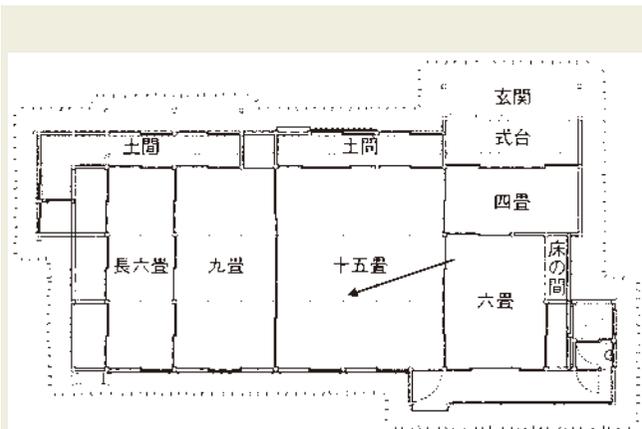
こ だまなん か
児玉南柯 えん きょう ぶん せい
 延享3年(1746)~文政13年(1830)

児玉南柯は、豊島家の血筋を引く甲府の家に生まれ、11歳で岩槻藩士児玉親繁の養子となりました。「南柯」は儒者としての名前で、名は「琮」といいます。

16歳で藩主大岡忠喜の御中小姓となり、また向井一郎太のもとで儒学を学びつつ、禅の修行なども積みましました。18歳で神田一ツ橋にあった江戸藩邸詰めとなり、大岡忠要の素読相手を勤め、以後、郡奉行、御側用人、御勝手取締方など藩の要職を歴任しました。岩槻藩領であった安房国千倉(千葉県南房総市)に清国の商船が漂着した時には、その処理にあたっており、後にこの事件を回想した『漂客紀事』という本を記しています。

43歳の時、南柯は部下の不正の責任をとって職を辞しました。その後は藩士の侍読などを勤めながら、自身の研究や藩士の教育へと力を注いでいきます。その中で、寛政11年(1799)に私塾として開校したのがこの遷喬館です。

南柯は文政13年(1830)に85歳で病のため亡くなり、遷喬館近くの浄安寺に葬られました。南柯は生前日記を記しており、その日記が現在も残されています。



■現在の岩槻藩遷喬館の間取り図(→は上の写真の向き)

現在の間取りは開校当初の姿を想定したものになっています。



かいやく
 会約

「遷喬館」の名前の由来

「遷喬館」という名前は、中国の書物『詩經』の「出自幽谷 遷于喬木」という一節に由来したものです。意味は「学問を欲し友を求め」ことを、「鳥が明るい場所を求めて暗い谷から高い木に飛び遷(移)る」姿にたとえたもので、この言葉は遷喬館の会約にも書かれています。「遷喬館」という名前には、「ここで学ぶ子どもたちに高い目標をもってほしい」という南柯の願いが込められているものと思われます。



埼玉県指定文化財 『児玉南柯日記及び関係書籍』